

ヴァーノン・リー 「ウェディング・チェスト」論

大 淵 利 春

はじめに

19世紀イギリスでは吸血鬼小説が流行したが、その多くが吸血という行為に性的な意味をもたせていることは、これまで多く論じられてきた。ポリドリ「の「吸血鬼」あたりを嚆矢とし、『吸血鬼ヴァーニー』、『カーミラ』、そして1897年のブラム・ストーカー作『ドラキュラ』で吸血鬼文学は頂点を迎える。『ドラキュラ』の吸血行為に性的な隠喩を読み取る研究が数多くなされていることは周知のとおりである。それに先立つレ・ファニュの『カーミラ』には女吸血鬼が登場し、濃厚なレズビアニズムを漂わせていることもまた、既に論じられている。(1) 以上のことから、吸血鬼小説の流行が、当時のイギリスにおける性に関する意識と密接に関連していることは明らかである。

世紀末に幻想的な短編を執筆していたヴァーノン・リーの「ウェディング・チェスト」もまた、こうした吸血鬼小説の変種と考えられる作品である。ただし、この短編には超自然的存在としての吸血鬼は登場しない点、また作者ヴァーノン・リーが女性であり、かつレズビアンであったという事実が、他の吸血鬼小説とは一線を画する特徴を、この作品に与えている。

なお、作品のタイトルになっているウェディング・チェストとは、14～16世紀に流行した結婚の贈答品で、花嫁が衣服や宝石類などを収納するために用いたものである。多くの場合、表面には装飾が施され、なかでもペトラルカの詩に取材した装飾の人气が高かったという。そして、「ウェディング・チェスト」の物語も、15世紀のイタリアで繰り広げられる。

1 女性の死体への関心

ブラム・ダイクストラはその著書『倒錯の偶像』において、19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期において、ヨーロッパの男性画家たちが、女性の死体を物神化し、その画像を夥しく残してきたことを紹介している。彼らは女性の死体を表現するために、文学や神話、宗教の中にその素材を求めた。最も有名な例は『ハムレット』におけるオフィーリアの水死を描いたミレイによる画像であろう。キリスト教からも、聖カタリナらの殉教した聖女たちが、女性の死体を表現するための素材として利用された。ダイクストラによれば、こうした流行の背景には、女性を私物化したいという男性の願望と、この時代に台頭してきた、いわゆる「新しい女」たちによる男性の権威の侵犯に対する恐怖との混交がある。(2)

文学の世界でも、吸血鬼小説の流行という現象に、女性の死体崇拝の影響が見られる。死体としての女性は、男性に反抗することのない受動的な存在だが、吸血鬼として蘇った女性は、男性の血を求める恐怖の存在であり、同時代の男性の、女性に対するアンビヴァレントな感情を具現化している。ゴッティエの女吸血鬼クラリモンドは棺桶の中から蘇ってくるし、ドラキュラに吸血され、死んだルーシーもまた吸血鬼として蘇ってくる。仮死状態としての眠りも、この時代の美術の世界で好まれたテーマであり、やはりダイクストラによれば、19世紀後半には眠れる美女の絵画が急増した。

詩人にして画家のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティとその妻エリザベス・シダルにまつわる、英文学史上有名なエピソードも、女性の死体への関心を呼び起こす一つの契機になったと言えるだろう。シダルはミレイの『オフィーリア』でモデルを務めた女性だが、その埋葬の際、ロセッティは自分の詩の原稿を一緒に埋葬した。しかし、7年後、ロセッティは、シダルの墓を暴き、詩の原稿を取り出した。彼女の遺体は、生前の状態を完全にとどめ、髪が詩の原稿に絡みついていたという。この多分に伝説的なエピソードの信憑性はともかく、この話が流布していたことは事実であり、やはり死女崇拝の流行に一役買っ

たことは確かであろう。

また、フランスの女優サラ・ベルナールが、棺の中に横たわり、死体を演じることを好んだというエピソードも、こうした流行の現れの一つであるかもしれない。

2 「ウェディング・チェスト」について

こうした流行に着想を得て、ヴァーノン・リーも吸血鬼小説の変種であり、一種のネクロフィリアの物語とも言える「ウェディング・チェスト」を書いた。

「ウェディング・チェスト」は、男二人（トロイロ、デシデリオ）、女一人（マダレーナ）のトライアングルを中心に展開する物語である。トロイロはペルージャの町で支配的な力を有する貴族で、職人であるデシデリオにウェディング・チェストの製作を依頼する。デシデリオは注文の品をトロイロに納入するが、結婚式の前日、婚約者のマダレーナをトロイロによって拉致されてしまう。一年後、デシデリオのもとに、彼自身が制作したウェディング・チェストが送られてくる。中には首に二つの刺し傷のあるマダレーナと、生まれて間もない嬰兒の遺体が入っていた。マダレーナはこの首の傷からトロイロに吸血されたと想像される。マダレーナの遺体をウェディング・チェストに入れて埋葬したデシデリオは、トロイロへの復讐を誓う。数年後、トロイロを刺し殺すことに成功したデシデリオは、復讐の完結として、流れ出るトロイロの血を飲む。そして、マダレーナの遺体が入ったウェディング・チェストを掘り返し、マダレーナの遺体とともに残りの人生を生きることが述べられる。

3 マリア信仰と血の赤

拙論「マリア信仰とゴースト・ストーリー」でも論じたように、19世紀中葉から世紀末にかけて、カトリック国であるフランスやイタリア、スペインなどでは、マリア信仰が熱狂的な高まりを見せた。(3) 簡単に述べれば、処女にして、

すなわち異性愛を知らずにキリストを身ごもったマリアは、レズビアンたちの憧憬の対象となったのである。ヴァーノン・リーも“if I have anywhere in my soul a secret shrine, it is to Our Lady”と述べており(4)、彼女の作品にはマリアのイメージが頻出する。Barbara Corrado Pope は、19世紀末の聖母マリア像について次のように述べている。

The blue and white Virgin seems not only immaculate but also bloodless and disconnected from the earth and from the experiences of most women. (5)

マリアは女性が女性であるがゆえにもつ経験—月経による出血、男性との性交渉、出産による苦痛など—すなわちレズビアン女性が忌み嫌う経験から逃れ、なおかつ自立した存在である。こうしたマリアのイメージは、当時流行していた女吸血鬼とは対照的である。『ドラキュラ』の犠牲者であるルーシーの遺体は次のように描写されるが、ここで注目したいのは、赤という色が強調されていることである。

She (Lucy) was, if possible, more radiantly beautiful than ever; and I could not believe that she was dead. The lips were red, nay redder than before: and on the cheeks was a delicate bloom. (6)

この赤いルーシーは、男性の血を求めるモンスターであり、女性の性欲を象徴し、かつ男性の暴力の犠牲者でもある。ヴァーノン・リーはこの赤という色に犠牲者としての女性や、女性のセックスを見出したのだろう。折しも、19世紀後半という時代は、ハヴェロック・エリスらの仕事により、性科学が飛躍的に発展した時代であり、女性の性欲が発見された時代でもある。こうした犠牲者としての女性、あるいは性欲をもった女性といったイメージが血の赤によって象徴され、逆に血の赤のない白い肌こそレズビアンの色となったのだ。そして、それこそ白いマリアが崇拜の対象となった由縁である。なお、ヴァー

ノン・リーは自身の色彩に関するイメージを次のように要約している。白は“the queen…of all colours”であり、“it is no allegory to say that white is good, and that the love of white is akin somewhat to the love of virtue.”とも述べている。その一方、例えば緑は“pollution, fertility and sex”を暗示し、赤は“lurid and sinister”といったイメージで捉えられ、現実、犠牲、そして月経の血と結び付けられた。(7) 吸血鬼に吸血されるということは、ヴァーノン・リーにおいては、血によって象徴される女性特有の生理的経験(月経、出産など)や社会的経験(結婚や夫への服従など)から脱がれることを意味し、それが白いマリア信仰や、血のない女性の美しい遺体への憧憬に繋がったのだ。

4 マリアとしてのマダレーナ

マダレーナの遺体は「クラウディウスのユリア」に例えられている。「クラウディウスのユリア」にまつわるエピソードは、ジョン・アディントン・シモンズが1875年に発表した *Renaissance in Italy* の中で紹介している。1485年、アッピア街道の下から、古代ローマの石棺が発見された。石棺には「クラウディウスの娘ユリア」と刻まれており、棺に納められた遺体は、防腐処理を施された「比類なく美しい15歳の少女」のものであった。彼女の遺体はやがて熱狂的な崇拜の対象となり、その美しさは「想像を絶した、あるいはまた筆舌に尽くしがたいものであった」。ローマ法王は、この遺体への崇拜が、正当なキリスト教への信仰を妨げるものと恐れ、再び埋葬させたという。このシモンズの記述にはウォルター・ペイターやオスカー・ワイルドも言及しており、ギリシア・ローマ時代に関心の強かった当時の知識人には広く知られていたエピソードらしい。(8) ヴァーノン・リーは彼らの著作から、このエピソードのことを知ったのかもしれない。

トロイロに血を抜かれ死んだマダレーナが、『ドラキュラ』のルーシーのように、復活して男性の血を求めるようなことはない。ヴァーノン・リーは女性の遺体を犠牲者や受動的な服従者のイメージ、あるいは性欲に駆られ、男性の血

を求めるモンスターのイメージから解放し、崇拝の対象に変えてしまう。その直接のヒントは「クラウディウスのユリア」のエピソードだと思われるが、リーはそこにレズビアンの憧憬の対象、マリアのイメージを重ね合わせた。

マダレーナに関する描写、設定にはマリアを連想させるものが少なくない。デシデリオは以前から絵の中にマダレーナを描きこむ際には、マリアのイメージを利用していった。さらに、デシデリオはウェディング・チェストを‘ascension day’、昇天祭に間に合うように完成する。カトリックにおいては、キリストの他に、マリアも死後すぐに天に上げられたという信仰がある。すなわち、「聖母被昇天」であるが、マダレーナの遺体は「聖母被昇天」のために完成されたウェディング・チェストに納められる。また、デシデリオはマダレーナの遺体を墓地ではなく庭園内に埋葬するが、この庭園に埋葬するという行為も暗示的である。それは、樹木や花々、それらの実で豊かな庭園で、泉があり、水路のおかげで水の行き渡った美しい庭園である。エミール・マールによれば、マリアのまわりに聖書の象徴、例えば庭、泉、果樹園など、を配する手法は中世以来の伝統である。(9) 加えて、マダレーナを埋葬した地点を示すためのアーモンドの木や、棺に遺体とともに収められるウイキョウも、マリアを連想させるモチーフである。アーモンドは、アロンの杖に受精せずに実がついたとされることから、処女性、処女懐胎を表すとされ、ウイキョウも中世においてはマリアの持ち物であったという。(10) つまり、マダレーナを埋葬する庭園も、マリアを連想させる隠喩に満ちているのである。

以上のように、マダレーナとその遺体は、男性による女性に対する支配欲、そして同時に女性嫌悪の表出である吸血鬼小説の流行を逆手に取った、レズビアンとしてのヴァーノン・リーのマリア崇拝を表した存在であると考えられる。要約的に述べれば、ヴァーノン・リーにおいては、血の喪失が女性性の希薄化につながり、それが捕食者としての女性や犠牲者といったイメージから女性を解放し、それがさらに同時代のマリア信仰と結び付けられたのだ。

5 トロイロ

マダレーナを略奪し、子供を産ませ、吸血して死に至らしめるトロイロは、一面では異性愛の権化である。トロイロは次のように描写されている。

Now it so happened that Messer Troilo, as he was the most beautiful, benign, and magnanimous of his magnificent family, was also the most cruel thereof, and incapable of brooking delay or obstacles. And being, as a most beautiful youth — he was only nineteen, and the first down had not come to his cheeks, and his skin was astonishingly white and fair like a woman's — of a very amorous nature. (11)

この引用にも見られるように、トロイロを描写するのに‘amorous’という形容詞が何度も用いられている。トロイロは *amorous love* の象徴である。そして、肌が白いことが描写される一方で、彼が纏う衣服には、金、緑、赤といった色が多用されるが、これらの色は、ヴァーノン・リーにおいては、*amorous love*、あるいは *sexual love* の象徴である。また、トロイロは馬にのって登場することが多いが、馬も *sexual love*, *sexual desire* の象徴である。デシデリオはウェディング・チェストの装飾画に、依頼人であるトロイロの肖像を描き込むが、その際、トロイロをトロイラスに模して描いている。名前からもトロイロとトロイラスの近似性は明瞭だが、トロイラスのクレシダとの恋愛も愛憎の入り混じった激しいもので、悲劇的結末を見る。つまり、*amorous love* ゆえに悲劇に至る人間の象徴としてトロイラスは捉えられ、トロイロの名前はそこから命名されたと考えられる。そして、マダレーナに子供を産ませるトロイロは生殖の象徴でもある。

こうした男性的暴力性や生殖を表象する一方、トロイロの容姿の描写は、同性愛者を連想させるに十分なものである。初登場時、19歳だったトロイロは、26歳になってもその若さを失わない、吸血鬼的資質をもった存在として描かれている。

And Messer Troilo was twenty-six years old, but seemed much younger, having no beard, and a face like Hyacinthus or Ganymede, whom Jove stole to be his cup-bearer on account of his beauty. (12)

このように、トロイロは年を取らないという吸血鬼的属性を有し、また美少年ぶりが強調されている。そして、その女性に対する暴力的な欲望にも関わらず、ヒアシンサスやガニューメデスに比されるトロイロに、ホモセクシャルの性質を読み取ることは容易であろう。パトリシア・プルハムは、このトロイロを去勢された歌手カストラートであると解釈している。そして、Troilo という名前が、トロイラスという名前からのみならず、troilism という語から着想されたと考え、この語に「同性愛的傾向をもつセックスパートナー」という意味があることを、OED の記述を引用しながら指摘している。(13) トロイロが異性愛の一つの到達点とも言える結婚の破壊者として登場する点も、彼が同性愛を表していることの証左であろう。従って、トロイロは、異性愛、同性愛を併せ持つ *amorous love* の象徴ということになる。そのトロイロが、デシデリオに刺殺され、血を抜かれ、その男性性、*amorous* な性質を失う。トロイロの遺体は、クラウディウスの娘ユリアの遺体のごとく、その美しさのあまり崇拝の対象となるのである。

And when he (Troilo) lay on the street dead, many folk, particularly painters, came to look at him for his great beauty. (14)

トロイロは '*amorous love*' の根源である血を失うことで、異性愛を失い、後に残ったその中性的な美しさが崇拝の対象となる。つまり、マダレーナの場合と同様に、血の喪失が性の曖昧さにつながるのである。

6 デシデリオ

デシデリオは中性的なトロイロとは対照的に男性的な男として登場する。しかし、婚約者を略奪され、遺体を送り付けられた後のデシデリオは、同性愛的性質を見せるようになる。そして、トロイロを殺害し、同性である男性の血を飲むという行為を通して、デシデリオも中性的な存在に変化する。

トロイロ殺害を企てるデシデリオは、変装の為に髭を伸ばし、ギリシア人だと名乗るが、世紀末文学の文脈では、ギリシア人はしばしばホモセクシャリティを暗示する。また、デシデリオは修道院で復讐に使う刀を祭壇に置き、復讐の誓いを立て、あるいはマダレーナを埋葬する際に掘り起こした土を食べ、最後にはトロイロの血を飲む。プルハムはこうしたデシデリオが行う宗教的儀式にディオニュソスの秘儀を見出し、ディオニュソス祭においては、性の境界が曖昧になると指摘している。(15) そして、ジョナサン・ハーカーについて「その男は私のものだ」と叫ぶドラキュラがそうであるように、同性であるトロイロの血を飲むという行為にホモセクシャリティが暗示されていることは明らかである。

イヴ・セジウィックはルネ・ジラルルの研究を援用しつつ、性愛のトライアングルについて考察している。セジウィックは次のように述べている。

性愛上の対立がいかなるものであれ、ライヴァルふたりの絆は、愛の対象とふたりをそれぞれ結びつける絆と同程度に激しく強い—つまり、彼(ジラルル)によると「ライヴァル意識」と「愛」は異なる経験ではあっても、同程度に強く多くの点で等価だ—というのだ。(中略) 性愛の三角形では、愛の主体と対象を結びつける絆よりも、ライヴァル同士の絆のほうがずっと強固であり行為と選択を決定する、というのが彼の見解のようだ。(16)

トロイロとデシデリオはマダレーナを巡るライヴァル同士でありながら、このルネ・ジラルルの理論に従えば、男性二人の絆の方が、マダレーナとの絆よ

りも強固であることになる。その強固な同性愛的絆が、ライヴアルの血を飲むという行為に象徴されているのだ。マダレーナ、トロイロにおいては、血を抜き取られることが、性差の希薄化につながっていたが、デシデリオにおいては、血を飲むという行為、血の獲得という行為を通して、男性性の喪失につながる。トロイロの体には、トロイロ(男)の血と、マダレーナ(女)の血がまじりあっているものであり、従って、その血を飲むデシデリオは、性的に曖昧な存在になったとも言える。なお、プルハムは、性的に曖昧になることを、フロイトの性理論を用いて、前エディプス期的退行と考えている。マダレーナの遺体をウェディング・チェストの棺に入れ、ときどきそれを開けて中をのぞきながら余生を過ごすデシデリオにとって、マダレーナは母親であり、棺の中を覗き込むという行為は、体内回帰願望を表しているという。(17) 以上のように、「ウェディング・チェスト」における男女三人のトライアングル関係は、男性同士のライヴアル関係や血のやり取りを通して、三者とも性的に曖昧な存在になり、マダレーナはレズビアン、トロイロはホモセクシャルの崇拜対象となり、デシデリオは前エディプス期に退行してしまう。

まとめ

「ウェディング・チェスト」を巡る3人の登場人物の悲劇的末路は、デシデリオによるウェディング・チェストの装飾画にそもそも暗示されていたと言える。デシデリオはペトラルカの‘Triumph of Love’からインスピレーションを受けた装飾を施す。それは4つの部分に分けられており、‘amorous passion’の4段階を表している。ペトラルカの『愛の凱旋』は、愛の神アモールが、その捕虜たちを連れて凱旋する様を描いた詩で、その捕虜にはヴィーナス、ジュピター、パリス、ヘレネ、カエサル、トロイラスらが含まれる。既に述べたように、トロイロはトロイラスに模して描きこまれる。「愛の凱旋」においては、愛はキューピッドの形をとって表されているが、それは「理想化も、神秘化もされない愛欲の寓喩に他ならない」(18) ヴァーノン・リーにおいては、ペトラル

カにおけるキューピッドは *amorous* という形容詞で表現され、ストーリー上は、それは血によって表象されている。

「ウェディング・チェスト」の物語は、血のやり取りを通して、主要な三人の登場人物が、*amorous* な性質を奪われ、すべて性的に曖昧な存在に変容する物語である。両性の役割分担が厳密に規定されていた 19 世紀に生きたレズビアンであるヴァーノン・リーは、性差の希薄化の物語を通して、自らのレズビアンの性向を表現したと考えられる。当時流行していた吸血鬼の物語や、死女崇拜は、男性による女性支配の願望を表出したものであったにもかかわらず、リーはそれを逆用したのだ。

デシデリオによる装飾は“*all earthly love leads but to death*”を表しているが、ヴァーノン・リーのように、情熱的な愛情や、肉体愛を否定すれば、究極的には生の否定、ネクロフィリアに行きつかざるを得ない。実際、ヴァーノン・リーは、友人のアン・メイヤーズの遺体の顔を写した写真を、枕元に貼っていたという。それほどに *amorous love* に固執し、否定するということは、逆に言えばヴァーノン・リーは *amorous love* の持ち主であり、その表出を恐れていた、と考えられるのではないだろうか。しかし、レズビアンの彼女にとって、その行為は社会的には容認されない。そうした葛藤の中から、「ウェディング・チェスト」の物語は想像されたのではないだろうか。

注

- (1) 『カーミラ』におけるレズビアニズムを論じた論文は多々あるが、例えば、Ilona Gaul の *Women's Sexual Liberation from Victorian Patriarchy in Sheridan Le Fanu's Carmilla* が挙げられる。
- (2) この点については、ブラム・ダイクストラ著『倒錯の偶像 世紀末幻想としての女性悪』第Ⅱ章「死女と物神化される眠り」に詳しい。
- (3) 『亡霊のイギリス文学 豊穡なる空間』所収の拙論「マリア信仰とゴースト・ストーリー ヴァーノン・リーの幻想短編」参照。
- (4) Vernon Lee. *For Maurice: Five Unlikely Stories*, xvii - xviii.

- (5) Barbara Corrado Pope. 'Immaculate and Powerful: The Marian Revival in the Nineteenth Century.' Clarissa W. Atkins, Constance H. Buchanan, and Margaret R. Miles, ed. *Immaculate and Powerful*. Boston: Beacon P, 1985, p.134.
- (6) Bram Stoker. *Dracula*. Oxford: Oxford University P., p186.
- (7) Burdett Gardner. *The Lesbian Imagination*. New York: Garland, p.349, 405.
- (8) 例えば、オスカー・ワイルドはエッセイ「仮面の告白」の中で、クラウディウスの娘ユリアに言及している。
- (9) エミール・マール『中世末期の図像学』上巻 289 ～ 291 ページ。
- (10) 『イメージ・シンボル事典』の「アーモンド」「ウイキョウ」の項を参照。
- (11) Lee, *Hauntings and Other Fantastic Tales*, p.235.
- (12) Lee, *Hauntings and Other Fantastic Tales*, p.241.
- (13) Pulham, pp.86-87.
- (14) Lee, *Hauntings and Other Fantastic Tales*, p.242.
- (15) Pulham, p.87.
- (16) イヴ・K・セジウィック『男同士の絆』32 ページ。
- (17) Pulham, p.87.
- (18) ペトラルカ『凱旋』270 ページ。

参考文献

- Colby, Vineta. *Vernon Lee: A Literary Biography*. Charlottesville: University of Virginia, 2003.
- Gardner, Burdett: *Lesbian Imagination: A Psychological and Critical Study of 'Vernon Lee'*. New York: Garland, 1987.
- Gaul, Ilona. *Women's Sexual Liberation from Victorian Patriarchy in Sheridan Le Fanu's Carmilla*. Norderstedt: GRIN Verlag, 2004.
- Gunn, Peter. *Vernon Lee: Violet Paget, 1856-1935*. London: Oxford University Press, 1964.
- Lee, Vernon. *For Maurice: Five Unlikely Stories*. London: John Lane, 1927.

- Lee, Vernon. *Hauntings and Other Fantastic Tales*. Peterborough: Broadview Editions, 2006.
- Maxwell, Catherine and Patricia Pulham ed. *Vernon Lee: Decadence, Ethics, Aesthetics*. Palgrave Macmillan, 2006.
- Pope, Barbara Corrado. 'Immaculate and Powerful: The Marian Revival in the Nineteenth Century.' (Clarissa W. Atkins, Constance H. Buchanan, and Margaret R. Miles, ed. *Immaculate and Powerful: The Female in Sacred Image and Social Reality*. Boston: Beacon P, 1985.)
- Pulham, Patricia. *Art and Transitional Object in Vernon Lee's Supernatural Tales*. Hampshire. Ashgate, 2008.
- Stoker, Bram. *Dracula*. Oxford: Oxford University P., 2011.
- Symonds, John Addington. *Renaissance in Italy*. New York: Henry Holt and Company, 1888.
- Zorn, Christa. *Vernon Lee: Aesthetics, History, & the Victorian Female Intellectual*. Athens: Ohio University P, 2003.

- ルネ・ジラルール著 古田幸男訳 『欲望の現象学』法政大学出版局 1971年。
- アト・ド・フリース著 山下圭一郎主幹 『イメージ・シンボル事典』大修館 1984年。
- ブラム・ダイクストラ著 富士川義之他訳 『倒錯の偶像 世紀末幻想としての女性悪』パピルス 1994年。
- エミール・マール著 田中仁彦他訳『中世末期の図像学』国書刊行会 2000年。
- イヴ・K・セジウィック著 上原早苗、亀沢美由紀訳 『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版局 2001年。
- フランチェスコ・ペトラルカ著 池田廉訳 『凱旋』名古屋大学出版局 2006年。
- 富士川義之・結城英雄編 『亡霊のイギリス文学 豊穡なる空間』国文社 2012年。